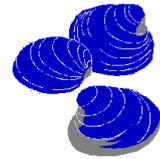


かわ こ  
**川つ湖通信 第7号**



(本誌はホームページでもご覧いただけます。 <http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/naisuimen> )

## 高津川 H22年度のアユ流下仔魚数は約29億尾

### 今春は多数の稚魚が遡上

今年もアユの稚魚の遡上シーズンとなり、高津川をはじめとする県下の河川では多くの稚魚の遡上が見られています。今回は現在のアユ稚魚遡上の状況と、アユ資源を増やすための高津川漁協の取り組みを紹介します。

#### 今年もアユの遡上始まる

春になり河川の水温も上昇し、今年もアユの遡上が始まりました。県西部の高津川では3月31日にアユの遡上が初めて確認され、4月下旬現在も多数の遡上が見られています。堰堤の直下などでは遡上稚魚が真っ黒になるほど群れており(図1)、近年にないほど遡上数が多いという声も聞かれます。

江の川・三隅川・周布川など県内のその他の河川でも遡上稚魚が多く確認されています。島根県内の今年のアユの遡上は、時期が例年よりやや遅れているものの、全般的にかなり量が多いようです。遡上数は前年ふ化した仔魚の量と、仔魚の海での生き残りにより決まりますが、海での生残率は自然条件に大きく左右され、人には如何ともし難い部分があります。一方、仔魚を増やすことは人により何とかできるので、高津川においては漁協・漁業者の方がそのための取り組みを進めてきました。高津川における今年の遡上の多さはそうしたアユ増殖の努力がかなり大きな要因であると思われま



図1 遡上してきた稚アユ(匹見川剣先堰堤にて)

#### 高津川漁業協同組合のアユ増殖への取り組み

高津川のアユの漁獲量は昭和の時代には年間100~200トンありましたが、平成に入ってから年間100トン未満の水準で低迷しています。水産技術センターではこれまでの調査結果に基づいてアユを増やすための提言を行い、これを受けて高津川漁協では平成20年からアユ資源回復の取り組みを行っています。(水産技術センター「とびくす」No.32(平成20年3月)参照)

##### (1) 禁漁期間の拡大

アユ資源量が低迷している原因の一つは過剰漁獲による産卵親魚の不足があると考えられたため、高津川漁協では平成20年から親魚を保護するための全面禁漁の期間を拡大しました。これまでの水産技術センターの調査で高津川のアユの産卵期は10月中旬~11月下旬と幅があり、この時

期の親魚を保護することが重要であることが分かりました。このため、平成 19 年までの全面禁漁の期間 10 月 16 日～10 月 25 日（10 日間）を平成 20 年からは 10 月 11 日～11 月 30 日（51 日間）としました(図 2)。この結果、産卵期の親魚の漁獲がほぼなくなり、多くの卵を残せるようになったと考えられます。

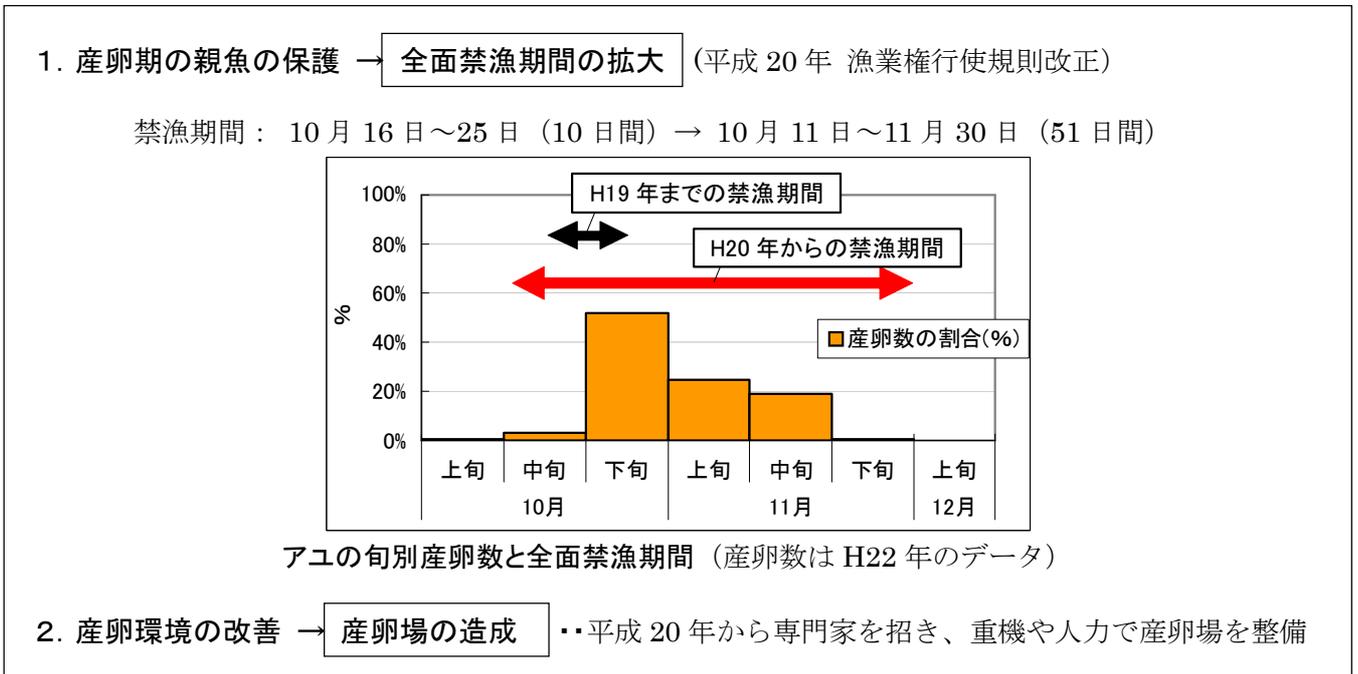


図2 高津川漁業協同組合のアユを増やすための取り組み

(2)産卵場の造成

もうひとつのアユの減少要因として産卵場の環境悪化が挙げられます。アユは 10～11 月に河川の下流部の瀬で産卵を行います。アユは石の間深くに産卵するため、産卵場の川底は数mm～5 cm 程度の小石で、土砂に埋もれていない“浮き石”の状態にあることが必要です。ところが調査の結果、産卵場の石の大きさが大型化していたり、石の間に砂泥が溜まって川底が固く締まり、アユが産卵しにくい状態にあることが分かりました。これは河川を巡る環境が悪化し、上流からの砂利の供給が減っていたり、あるいは出水による川底の攪乱が少なくなっていることが要因と考えられます。アユを増やすにはこの状態を人間の力で改善してやる必要がありますと考えられました。そこで、高津川漁協では平成 20 年からアユの産卵時期前に産卵場の造成を行い、アユが産卵しやすい環境を整備しています。産卵場の造成では、河床を掘り返して中の砂泥を洗い流し、河底をならして平瀬を作り出します(図 3, 4)。平成 22 年度は 3 カ所の瀬で 5,560 m<sup>2</sup>の産卵場を造成しました。造成した産卵場には多くの親魚が集まって産卵している様子が確認できました(図 5)。

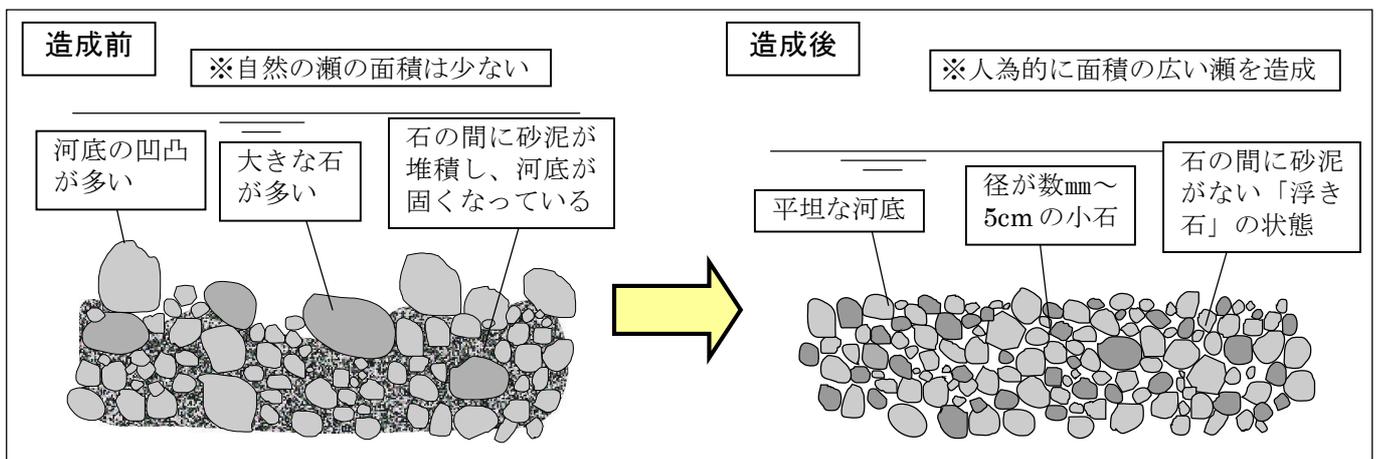


図3 産卵場造成の模式図



図4 アユの産卵場の造成



図5 造成した産卵場で産卵するアユ

**取り組みの成果・平成 22 年度の流下仔魚数は約 29 億尾まで回復**

では、これらの取り組みの成果は具体的にどのように現れているのでしょうか？水産技術センターでは、高津川のアユ資源量を把握するため、毎年流下仔魚数の調査を行っています。流下仔魚数とは卵からふ化して川を流れ下る仔魚の数で、その年の親アユの資源量の指標となります。これまでの調査で高津川の適正な遡上量を安定して得るためには、海での生き残りも考えて前年の流下仔魚数で少なくとも 38 億尾を海に送り出すことが必要と考えられており、高津川漁協ではこの数字を目標にアユの資源回復に取り組んでいます。

図 6 に高津川のアユの流下仔魚数調査結果を示します。高津川の流下仔魚数は平成 19 年に約 5 億尾まで減少しました。しかし、取り組みを始めた平成 20 年からは毎年右肩上がりに増加し、平成 22 年度の流下仔魚数は 29.2 億尾(速報値)にまで回復しました。これはひとえに上記の取り組みの効果が明確に表れた結果と考えられます。

今後もこのような取り組みを継続することで、高津川が昔のようにアユで一杯の川に戻ることを期待したいと思います。

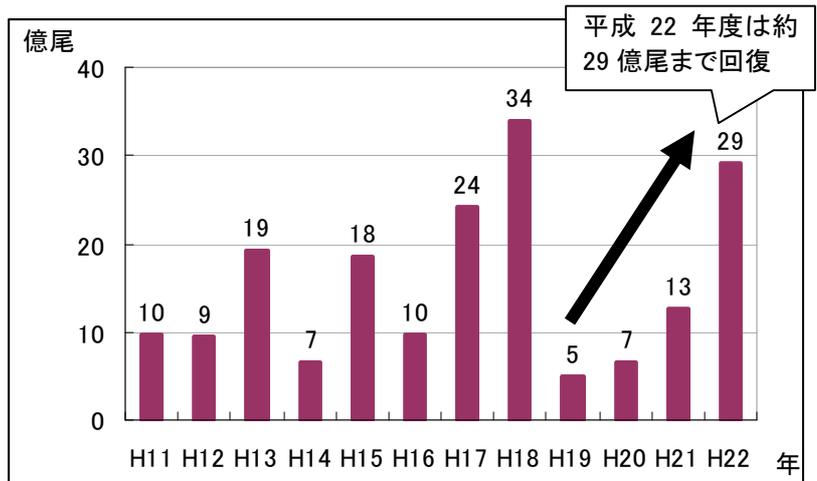


図6 高津川のアユ流下仔魚数の推移

- ◎ 水産技術センター内水面浅海部では漁業関係者や県民の皆様からの情報をお待ちしています。珍しい魚が捕れたり、川や湖で変わった現象などありましたら、是非下記までご連絡ください。
- ◎ 本誌はカラーの写真や図を使用しています。FAX でご覧の方は是非インターネットで内水面グループが運営するホームページ「島根の川と湖」にアクセスして本誌をカラーでご覧ください。

島根県水産技術センター 内水面浅海部 内水面グループ  
 住所：島根県出雲市園町沖の島 1659-1  
 TEL：0853-63-5101 FAX：0853-63-5108  
 ホームページ：<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/naisuimen/>  
 E-mail：[suigi-naisuimen@pref.shimane.lg.jp](mailto:suigi-naisuimen@pref.shimane.lg.jp)